

資料

発達障害に対する潜在的態度と発達障害者に対する 関わりや考え方の関連性

久崎孝浩¹⁾

The relation between implicit attitudes toward developmental disorders and involvements with and beliefs about persons with developmental disorders

Takahiro HISAZAKI

[要約] 本研究では、発達障害者との関わり体験が発達障害者に対する潜在的態度にどう関与するのか、また、その潜在的態度は顕在的態度とどう関連するのかを検討した。30名の学生が発達障害者への関わり経験や顕在的態度に関する質問紙に回答し、その後に発達障害に関する言語と画像の2バージョンの潜在連合テスト（以下、IAT）を受けた。その結果、まず、障害をもつ友人がいる学生の言語バージョンIATのD-score（Greenwald et al., 2003）はそうでない学生より有意に高く、障害をもつ友人がいる学生は発達障害者に対して潜在的に不快感を抱いている可能性が示唆された。また、発達障害者との関わりはIATのD-scoreとは有意な相関がなく、関わりの深さは潜在的態度に関与しない可能性が示唆された。しかし、生活場面での発達障害者に対する好意的態度は画像バージョンのD-scoreと有意な負の相関があり、生活場面での発達障害者に対する好意的態度をもつ人ほど潜在的に不快感を抱いていない可能性が示唆された。

キーワード：潜在的態度、潜在連合テスト、発達障害、接触仮説

I. 問題

潜在的態度とは、意識的な覚知から外れた、自己や対象に対する評価である（Devos, 2008）。また、潜在的態度は対象や事象に対する好ましいあるいは好ましくない感情・思考・行動を伴う過去の経験に関する、内省しても把握できない痕跡でもあり（Greenwald & Banaji, 1995）、それは無意識レベルで気づかないうちに行動に影響を及ぼしている（Gawronski & Payne, 2010）。潜在的態度は実験的に測定され、潜在連合テスト（implicit association test, 以下IAT）、評価的・意味的プライミング課題（evaluative and semantic priming tasks）、Extrinsic Affective Simon Task、Go/No-Go Association Task、感情誤帰属課題（Affect Misattribution Procedure）などの様々な手法があるが、特にIATはよく用いられ

ている。一方、顕在的態度は意識的で内省によって報告可能な態度であり、質問紙に対する回答によって測定される（Devos, 2008）。

潜在的態度と顕在的態度は同一対象に対して形成されるが、両者は必ずしも一致せず、行動に対して異なる影響を及ぼすこともある。態度と行動の関係に関する多くの研究知見を精査した研究では、潜在的態度は自発的でコントロールの不可能な無意識的な行動に対して予測的に影響しやすいのに対して、顕在的態度は意識してコントロールすることが可能な行動を予測しやすいことが確認されている（Devos, 2008）。潜在的態度と顕在的態度がこのように異なるならば、個人や集団との好意的な関係を築いて融和的な生活を考えるうえで顕在的態度よりも潜在的態度を検討することは重要課題である。また、両者が異なるならば、個人内に葛藤を引き起こすことも考えられ、潜在的態度と顕在的態度の間にずれが生まれる要因やそのずれを小さくする方法を検討することも重要課

¹⁾ 九州ルーテル学院大学人文学部心理臨床学科
hisazaki@klc.ac.jp

題である。こうした重要課題を抱える潜在的態度の測定は特に社会的偏見・差別研究で行われてきた。

障害者に対する態度研究では顕在的指標を用いた研究が中心であったが、障害者に対する言語的反応・非言語的反応・生理的反応を測定した研究(Heinemann, Pellander, Vogelbusch, & Wojtek, 1981)では、障害者に対する反応は回避的でネガティブであったものの、質問紙ではポジティブな印象や感情を報告しやすいことが明らかになった。この研究から障害者に対する潜在的態度に注目が集まるようになり、潜在的態度を扱う研究は増大していった。そして、障害者に対する潜在的態度と顕在的態度の比較を行った研究では、顕在的には「良い」と評価しても潜在的には「悪い」と評価するということが明らかになってきた(Kurita & Kusumi, 2009; Pruett & Chan, 2006)。障害者に対する潜在的態度の多くはこれまでにIATを用いて測定されてきた(栗田・楠見, 2014)が、その中でも身体障害(e.g., Rojahn, Komerlasky, & Man, 2008; Aaberg, 2012; 栗田・楠見, 2012)、ダウン症(Enea-Drapeau, Carlier, & Huguët, 2012)、知的障害(Hein, Grumm, & Fingerle, 2011)、精神障害(e.g., Thomas, Vaughn, & Doyle, 2007; Takahashi, Ideno, Okubo, Matsui, Takemura, Matsumura, Kato, & Okubo, 2009)に対する潜在的態度研究はあるが、発達障害に対する潜在的態度研究は殆どない。

発達障害を抱える人や子どもに対する態度は基本的には接近・回避行動として表れると考えられる。その行動を決定するのは基本的な感情であり、対象に対して快的な感情をもてば接近行動、不快な感情をもてば回避行動が引き起こされるであろう。そこでまず本研究では、発達障害に対する潜在的態度を把握するために「発達障害-快・不快」の潜在的連合の程度を把握するためのIATを作成する。

また、障害者に対する差別的態度を低減させる方法としてはこれまでに、障害者に関する知識を獲得させることを目的とした、「接触仮説(contact hypothesis)」(e.g., Allport, 1954; Stephan & Stephan, 1996)に基づいた外的な介入方法が提案されてきた(栗田, 2015)。接触仮説とは、外

集団メンバーに嫌悪感を持たずに接触することで、その外集団に対する態度が改善されることである。しかし、接触仮説に基づく考えは、差別的態度が消失する内的な心理プロセスにまで注目しない。換言すれば、障害者に関する知識を多くもつことが重視され、障害者との交流経験がもたらす障害者に関する内的表象の変化という本質的な差別的態度の解消に関する議論にまで至らない。しかしながら、Hein et al. (2011)の研究では、障害者との接触頻度の多さは自己報告による顕在的態度(感情・認知・行動の3側面それぞれ)を有意に予測するが、潜在的態度を有意に予測しなかった。このことは、障害者との接触が多ければ意識的にコントロール可能なレベルでは障害者に対する感情や認知を改めたり障害者に対する行動を調整したりすることはできるが、障害者との接触頻度は障害者に関する潜在的な意味表象ネットワークには直接作用しなかったことを示唆する。このことから、障害者との接触頻度のような量的側面ではなく、どのような接触体験があったかという質的側面に着目して、それがどのように潜在的態度に変化をもたらすかを検討する必要がある。

以上より本研究では、特に発達障害者に対する潜在的態度に着目し、発達障害者と接触する機会の単なる頻度的な多さではなく、その接触する機会の中で関わり体験の深さが発達障害に対する潜在的態度にどう関与するのかを検証する。また、潜在的態度と顕在的態度は必ずしも一致せずに行動に対して異なる影響を及ぼすこともあるが、潜在的態度とともに顕在的態度も測定し、潜在的態度が顕在的態度とどのように関連するのかも検討する。なお、本研究では潜在的態度をIATで測定するが、言語バージョンと画像バージョンのIATを各参加者に実施する。従来のIATは言語を用いることが多いが、言語よりも画像の方が具体的なイメージを喚起しやすい(意味表象ネットワークを活性化させやすい)人もいるのではないかと考える。そこで本研究は画像バージョンのIATも作成し、両バージョンのIAT結果で検討する。

II. 方法

1. 参加者

調査当時に、発達障害に関わるボランティアに深く関わっていた学生15名（男性3名、女性12名）と発達障害に関わるボランティアに関わっていなかった学生15名（男性3名、女性12名）が本研究の調査に参加した。調査に参加した学生30名の平均年齢は21.56歳で、SDは2.49歳であった。

2. 調査手続き

上記の調査は2018年8月から11月にかけて実施した。参加候補者として学生に広く参加募集を案内し、参加希望学生には筆者所属機関の個室で筆者と調査補助学生1名で調査内容を事前に説明した。参加希望学生には、発達障害に関する態度や考え方に関する調査であること、個室で質問紙調査と刺激画像による実験調査を実施しおよそ30分程度の時間を要すること、説明後に調査参加を中止したり参加中に辞退したりしてもよく参加は参加者の自由意思に基づくことを説明した。参加に承諾した学生（参加者）は、個室でボランティア参加頻度、参加年数、発達障害者への関わり方に関する質問紙に回答し、その後発達障害に関する言語と画像の2バージョンのIATを受けた。

3. 質問紙

参加者に以下の内容について質問紙で尋ねた。

(1) 障害をもつ友人の有無：障害をもつ友人がいるかについて「いる」「いない」のどちらかで回答を求めた。

(2) 発達障害者との関わり方の程度（関わり方の深さ）：河内（2006）と大谷（2002）を参考に作成した。項目として、「発達障害をもつ大人・子どもと話をしたことがある」「発達障害をもつ大人・子どもと一緒に仕事（遊び）をしたことがある」「発達障がいをもつ大人・子どもと一緒に食事をしたことがある」「発達障がいをもつ大人・子どもと生活を共にしたことがある」「発達障がいをもつ大人・子どものために活動するボランティアに参加したことがある」の5項目を作成して用いた。これらの各項目に対して自分自身に当てはまるか否かを「はい」「いいえ」で尋ねた。「はい」を1点、「いいえ」を0点として5項目を合計した得点を発達障害者との関わり方の程度の得点とした（0～5点）。この得点は項目内容からも分かるよ

うに、発達障害者との接触の頻度というより関わり方の深さの程度を表すもので、得点が高いほど発達障害者との深い関わり方の経験を有していると考えられる。

(3) 発達障害者に対する考え方（顕在的態度）：生川（1995）の尺度（5件法）を使用し、「実践的好意」（6項目）、「能力肯定」（7項目）、「統合教育」（4項目）、「地域交流」（7項目）、「理念的好意」（4項目）の5つの下位尺度で構成される。「実践的好意」は、「発達障害をもつ大人・子どもが地域社会で生活することで、地域社会にいい影響があると思う」「発達障害をもつ大人・子どものためのボランティア活動に参加したいと思う」等の項目で構成され、生活する中での発達障害者に対する好意を示す。「能力肯定」は、「発達障害をもつ大人・子どもも、まわりの大人・子どもと仲よくする能力があると思う」「発達障害をもつ子どもの教育効果は、かなりあがると思う」等の項目で構成され、発達障害者の学力やコミュニケーション力などの能力に対する肯定的な見方を示す。「統合教育」は、「通常学級や一般の中学校・高校・大学でも、発達障害をもつ子どもを十分教育することができると思う」「発達障害をもつ子ども・生徒・学生は、他の子ども・生徒・学生たちと一緒に通常学級や一般の中学校・高校・大学で勉強することができると思う」等の項目で構成され、健常者と障害者は同じ場所で教育を受けることができるという肯定的態度を示す。「地域交流」は、「発達障害をもつ子どもも他の子どもたちと一緒に生活することが必要だと思う」「発達障害をもつ大人・子どももどんどん社会参加をした方がよいと思う」等の項目で構成され、地域の中で発達障害者と一緒に交流することに対する積極的な理解を示す。「理念的好意」は、「発達障害をもつ大人・子どものために、地域環境をもっと住みやすいものにしていくべきだと思う」「発達障害をもつ大人・子どもが仕事につけるように国でもっと働きかけるべきだと思う」等の項目で構成され、発達障害者を理解して受け入れていく考えを示す。

なお、5つの下位尺度それぞれの得点は、その尺度を構成する項目間の平均値とした。そして、5つの下位尺度の得点それぞれは発達障害者に対

する自覚された意識的な考え方であり、下位尺度の得点が高いということはその顕在的態度が強いことを表す。

4. IAT

障害者に対する潜在的ステレオタイプとして、「快-不快」と「発達障害」の潜在的連合を測定する IAT を実施した。IAT は言語バージョンと画像のバージョンの2つのバージョンを用意した。ターゲットカテゴリーは「発達障害」と「健常」とし、属性カテゴリーは「快」と「不快」と


した。そして、言語バージョンでは Table 1 に示すように、ターゲット刺激5組と属性刺激5組を用いた。画像バージョンでは、Table 2 に示すように、ターゲット刺激4組と属性刺激4組を用いた。参加者はこの2つのバージョンの IAT のどちらも参加し、言語と画像のどちらのバージョンを先に実施するかの順序はランダム化された。

(1) 刺激:属性刺激の選定に関しては言語バージョンも画像バージョンも共通で大学生12名の回答に基づいて選定した。具体的には、「快」に関

Table 1 言語バージョン IAT のターゲット刺激と属性刺激

カテゴリー	ターゲット		属性	
	発達障害	健常	快	不快
刺激	注意欠陥多動障害	落ち着いた行動	楽しい	気持ち悪い
	広汎性発達障害	適切な意思疎通	嬉しい	汚い
	学習障害	偏りのない学習	優しい	恐ろしい
	協調運動障害	協調的な運動	かわいい	醜い
	言語障害	適切な言葉づかい	素晴らしい	卑しい

Table 2 画像バージョン IAT のターゲット刺激と属性刺激

カテゴリー	ターゲット		属性	
	発達障害	健常	快	不快
刺激			楽しい	気持ち悪い
			嬉しい	汚い
			優しい	恐ろしい
			かわいい	醜い

(注) ターゲット刺激として用いたピクトグラムは、Shutter stock より障害や問題行動を表現したものや子どもの遊びや学習活動を表現したものを多く入手して、12名の学生による「発達障害-健常」の7段階評定に基づいて選定したものである。

わる単語35語と「不快」に関わる単語35語を用意し、各単語について12名の大学生が7段階評定（「1. 快い」～「4. どちらとも言えない」～「7. 不快な」）で回答した。名詞より形容詞のほうが障害に対する印象を与えやすいと考えて、平均得点高いほうから順に形容詞を5つ選び、それらを「不快」属性刺激とした。また同様に、平均得点の低いほうから順に形容詞を5つ選び、それらを「快」属性刺激とした。それらの刺激は Table 1 と Table 2 を参照されたい。

また、「発達障害」と「健常」に関する言語バージョンのターゲット刺激に関しては、文部科学省（2007）が定義している発達障害の5種の障害名を「発達障害」のターゲット刺激とした（Table 1 参照）。「健常」のターゲット刺激は、5種の障害名それぞれの主特徴とは反対の意味をもつ特徴を端的に表す5つの表現を作成した（Table 2 参照）。画像バージョンでは、Shutterstock より入手した障害や問題行動を表現したピクトグラムを10個と子どもの様子を表現したピクトグラムを10個用意し、各ピクトグラムについて大学生12名が7段階評定（「1. 健常」～「4. どちらとも言えない」～「7. 発達障害」）で回答した。平均得点が高く「4. どちらとも言えない」より高いピクトグラムを「発達障害」ターゲット刺激とした（Table 2 参照）。

また、平均得点が低く「4. どちらとも言えない」よりも低いピクトグラムを「健常」ターゲット刺激とした（Table 2 参照）。

(2) 各ブロックの課題内容：言語バージョン IAT も画像バージョン IAT も7つのブロックで構成される（Table 3 参照）。言語バージョンと画像バージョンでは課題内容についてターゲット刺激と各ブロックの試行回数以外に差異はない。参加者が IAT の課題に取り組む前に、中央下に出てくる刺激をなるべく早く画面上部にある2つカテゴリーのいずれかに分類し、左側のカテゴリーに当てはまるならキーボードの F キーを押し、右側のカテゴリーに当てはまるなら J キーを押すよう教示がなされた。各ブロックの課題は以下のとおりである。

第1ブロックにおいては、言語バージョンでも画像バージョンでも参加者には、属性刺激（単語）が画面左側の「快」と右側の「不快」のどちらに属するかをなるべく早く分類させた。

第2ブロックにおいて、言語バージョンではターゲット刺激（単語）が「健常-発達障害」のどちらに属するか、画像バージョンではターゲット刺激（画像）が「健常-発達障害」のどちらに属するか、参加者になるべく早く分類させた。また、分類させる前に、言語バージョンも画像バー

Table 3 言語バージョン IAT も画像バージョン IAT の各ブロックの課題内容

ブロック	言語バージョン IAT		画像バージョン IAT	
	内容	試行数	内容	試行数
1	属性刺激(単語)に関する快-不快の識別	20	属性刺激(単語)に関する快-不快の識別	16
2	ターゲット刺激(単語)に関する健常-発達障害の識別	20	ターゲット刺激(画像)に関する健常-発達障害の識別	16
3	属性刺激(単語)・ターゲット刺激(単語)に関する快+健常-不快+発達障害の識別	20	属性刺激(単語)・ターゲット刺激(画像)に関する快+健常-不快+発達障害の識別	16
4	属性刺激(単語)・ターゲット刺激(単語)に関する快+健常-不快+発達障害の識別	40	属性刺激(単語)・ターゲット刺激(画像)に関する快+健常-不快+発達障害の識別	32
5	属性刺激(単語)に関する不快-快の識別	20	属性刺激(単語)に関する不快-快の識別	16
6	属性刺激(単語)・ターゲット刺激(単語)に関する不快+健常-快+発達障害の識別	20	属性刺激(単語)・ターゲット刺激(単語)に関する不快+健常-快+発達障害の識別	32
7	属性刺激(単語)・ターゲット刺激(単語)に関する不快+健常-快+発達障害の識別	40	属性刺激(単語)・ターゲット刺激(単語)に関する不快+健常-快+発達障害の識別	32

ジョンもターゲット刺激が「健常-発達障害」のどちらに属するかを画面に表示し、十分に理解した上で分類させた。

第3ブロックと第4ブロックにおいては、属性刺激とターゲット刺激の計4種（言語バージョンでは属性刺激（単語）2種とターゲット刺激（単語）2種の計4種、画像バージョンでは単語刺激（単語）2種とターゲット刺激（画像）2種の計4種）を第1ブロックと第2ブロックを合わせた課題を参加者に実施した。画面左側に「快+健常」が表示され、画面右側には「不快+発達障害」が表示されて、参加者には刺激を左右どちらかのカテゴリになるべく早く分類させた。これらのブロックでも、分類させる前に、言語バージョンも画像バージョンともにターゲット刺激が「健常-発達障害」のどちらに属するかを画面に表示して、参加者には十分に理解するよう促した。

第5ブロックでは、第1ブロックのカテゴリの位置を反対にして、参加者には、属性刺激（単語）を画面左側の「不快」と右側の「快」のどちらに属するかをなるべく早く分類させた。

第6ブロックと第7ブロックでは、第3ブロックや第4ブロックの属性カテゴリの位置を反対にして画面左側に「不快+健常」を表示し、画面右側に「快+発達障害」を表示して、同じ刺激4種（言語バージョンでは属性刺激（単語）2種とターゲット刺激（単語）2種の計4種、画像バージョンでは単語刺激（単語）2種とターゲット刺激（画像）2種の計4種）を参加者になるべく早く分類させた。これらのブロックでも、分類させる前に、第3ブロックや第4ブロックと同様に、ターゲット刺激が「健常-発達障害」のどちらかを表示して十分な理解を促した。

(3) IATの得点化：参加者が潜在的に発達障害を不快に感じているのであれば、属性カテゴリとターゲットカテゴリが一致している第3ブロックや第4ブロックでは分類してキーを押すまでの反応時間が早くなるが、両カテゴリが不一致にある第6ブロックや第7ブロックではその反応時間が遅くなるものと考えられる（Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998）。そこでこの考えにしたがって、Greenwald, Nosek, & Banaji (2003) のアルゴリズムに基づいて算出さ

れるD-scoreを各バージョンのIAT得点とした。このD-scoreが大きいかほど「発達障害-不快」の潜在連合が強く、発達障害を潜在的に不快に感じている度合いが強くなる。

D-scoreは、Greenwald et al. (2003) にしたがって、第3、4、6、7ブロックの反応時間データを用いて以下の手順で算出した。①10 s以上の反応時間を示した試行は除外し、また300 ms未満の反応時間を示す試行回数が全体の10%以上になる参加者のデータは除外した（結果的に除外対象となる試行や参加者はなかった）。②各ブロックで正答した試行の反応時間の試行平均を算出した。③第3ブロックと第6ブロックの全試行の反応時間の標準偏差（3・6ブロックのプールSD）と第4ブロックと第7ブロックの全試行の反応時間の標準偏差（4・7ブロックのプールSD）を算出した。④誤答の反応時間は、その誤答を示したブロックの反応時間平均値に600 msを加算した値に置き換えた。⑤正答と誤答を合わせた全試行の反応時間平均値を4つのブロックそれぞれで算出した。⑥第6ブロックの反応時間平均値から第3ブロックの反応時間平均値を引いた値を3・6ブロックのプールSDで割り、同様に第7ブロックの反応時間平均値から第4ブロックの反応時間平均値を引いた値を4・7ブロックのプールSDで割った。⑦最後に、⑥で算出した値を平均するが、それがD-scoreである。

Ⅲ. 結果

1. 質問紙の各尺度得点とIATのD-scoreの基本統計量

まず、本研究の調査において、質問紙で不適切な回答を示したりIATで不適切な反応を示したりする参加者はいなかった。総勢30名の参加者の質問紙の各尺度得点とIATのD-scoreの基本統計量をTable 4に示す。

2. 言語バージョンD-scoreと画像バージョンのD-scoreの相関関係

言語バージョンIATのD-scoreと画像バージョンIATのD-scoreの相関係数を算出したところ、有意な相関関係はなかった（ $r=-0.15$, $n=30$, $p=0.43$ ）。両バージョンが同じ潜在的態度を測定しているのであれば相関係数は正の値を示し有意

Table 4 質問紙の各尺度得点及び IAT の D-score の基本統計量

	平均	SD	最小値	最大値	
障害をもつ友人の有無	0.70	0.46	0.00	1.00	
発達障害者との関わり の程度	4.30	0.78	2.00	5.00	
発達障害者 に対する考え方	実践的好意	4.49	0.49	3.33	5.00
	能力肯定	4.50	0.38	3.57	5.00
	統合教育	3.93	0.76	1.75	5.00
	地域交流	4.74	0.28	4.14	5.00
	理念的好意	4.63	0.38	3.75	5.00
D-score (言語バージョン)	0.65	0.40	-0.31	1.52	
D-score (画像バージョン)	0.85	0.47	0.00	1.92	

Table 5 言語バージョン IAT と画像バージョン IAT の D-score の性差

	男性 (6名)	女性 (24名)	t	p	d
D-score (言語バージョン)	0.51 (0.58)	0.68 (0.36)	0.94	0.36	0.8
D-score (画像バージョン)	1.28 (0.37)	0.74 (0.44)	2.79	0.0094	1.67

Table 6 言語バージョン IAT と画像バージョン IAT の D-score における障害をもつ友人の有無による差異

	障害をもつ友人 がいない(9名)	障害をもつ友人 がいる(21名)	t	p	d
D-score (言語バージョン)	0.41 (0.25)	0.75 (0.42)	2.19	0.037	1.21
D-score (画像バージョン)	0.91 (0.53)	0.82 (0.46)	0.43	0.67	0.41

な結果になると思われるが、そのような結果にはならなかった。両バージョンは発達障害に対する潜在的態度において異なる部分を測定しているか、あるいはどちらかが発達障害とは異なるものに対する潜在的態度を測定している可能性が考えられ、各 D-score に関する結果の解釈においては注意を要する。

3. IAT の D-score の性差

言語バージョン IAT と画像バージョン IAT それぞれの D-score の性差について対応のない t 検定を行ったところ、言語バージョンでは有意差はなかったが、画像バージョンでは女性の D-score は男性よりも有意に低かった (Table 5 参照)。女性は発達障害に対して潜在的に不快に感じる傾

向が低いことが示唆された。

4. IAT の D-score と障害をもつ友人の有無との関係

言語バージョン IAT と画像バージョン IAT それぞれの D-score が障害をもつ友人がいる学生とそうでない学生の間でどのように異なるのかについて対応のない t 検定を実施したところ、画像バージョンでは D-score に有意差はなかったが、言語バージョンでは障害をもつ友人がいる学生のほうがそうでない学生に比べて D-score が有意に高かった (Table 6 参照)。障害をもつ友人がいる学生のほうがそうでない学生に比べて発達障害に対して潜在的に不快感を抱いている可能性が示唆された。

Table 7 発達障害者との関わりの程度や発達障害者に対する考え方の
下位尺度得点と IAT の D-score の相関係数

	D-score (言語)	D-score (画像)	
発達障害者との関わりの程度	0.06	0.14	
実践的好意	0.08	-0.48 **	
能力肯定	0.01	-0.22	
発達障害者に 対する考え方	統合教育	0.04	-0.20
地域交流	0.22	-0.24	
理念的好意	-0.08	-0.30	

N=30, *p<0.05, **p<0.01

5. IAT の D-score と発達障害者に対する関わり や考え方との関係

発達障害者との関わりの程度や発達障害者に対する考え方の各下位尺度得点が言語バージョン IAT と画像バージョン IAT それぞれの D-score とどのような関連があるのか、相関分析を行った。その結果、発達障害者に対する関わりの程度は言語バージョンと画像バージョンのどちらの IAT の D-score とも有意な相関は確認されなかった (Table 7 参照)。この結果より、発達障害者との関わりが深い人は発達障害に対する潜在的な不快感を抱かないことは示唆されなかった。一方、発達障害者に対する考え方においては、下位尺度である「実践的好意」と画像バージョンの D-score との間に有意な負の相関が認められた (Table 7 参照)。この結果は、生活の中で発達障害者に積極的に関わることを好ましく思っている学生ほど、発達障害者に対して潜在的に不快感を持っていない可能性を示唆していた。

IV. 考 察

本研究は、発達障害者との接触機会の中での関わりの深さが発達障害に対する潜在的態度にどう関与するのか、また、発達障害に対する潜在的態度と顕在的態度はどのような関連があるのかを検討することが目的であった。調査したデータの分析結果より、まず、言語バージョン IAT で、障害をもつ友人がいる学生の D-score はそうでない学生に比べて有意に高く、障害をもつ友人がいる学生のほうが発達障害に対して潜在的に不快感を抱いている可能性が示唆された。また、発達障害者との関わりの程度は D-score と有意な相関関係がなく、関わりの深さは潜在的態度に関与しない

可能性が示唆された。しかし、顕在的態度において「実践的好意」は画像バージョンの D-score と間に有意な負の相関が認められ、生活場面で発達障害者に積極的に関わることに好意的な人ほど潜在的に不快感を抱かない可能性が示唆された。

1. IAT の D-score の性差について

画像バージョンで女性の D-score は男性よりも有意に低かった結果から、女性は発達障害に対して潜在的に不快に感じる傾向が低いことが示唆された。何故、このような性差が生じたのかについて1つ考えられるのは、共感性の性差である。近年、共感性の性差を決定づける生物学的基盤を示唆する研究成果が多数報告されている。例えば、胎生期のテストステロンのレベルの高さが定型発達の子の共感的行動に関与することが報告されている (Knickmeyer, Baron-Cohen, Raggatt, Taylor, and Hackett, 2006)。脳機能に関しては、女性は男性よりも他者の失敗を目撃したときに潜在300 ms で内側前頭前野の陰性成分が確認されている (Fukushima & Hiraki, 2006)。また、男性では囚人のジレンマゲームで不正をしたプレイヤーが電気ショックを受けるのを見たときに特に痛みに関連した前部島や前部帯状皮質は活性化しないのに対して、女性では不正したプレイヤーでも電気ショックを受ける場面を見ると痛みに関連した前述の脳部位が活性化することが報告されている (Singer, Seymour, O'Doherty, Stephan, Dolan, & Frith, 2006)。こうした研究成果より、女性は男性に比して共感性が高く、この性差は生物学的に頑健なものと言える。共感性の高い女性は男性に比して発達障害者の内的状態への共感を背景に発達障害者を理解しやすいために、女性は男性よりも発達障害者に対して潜在的に不快感を

抱く傾向が低かったのではないだろうか。

2. IATのD-scoreと障害をもつ友人の有無との関係について

言語バージョンIATで障害をもつ友人がいる学生のD-scoreはそうでない学生に比べて有意に高く、障害をもつ友人がいる学生のほうがそうでない学生に比べて発達障害に対して潜在的に不快感を抱いている可能性が示唆された。この結果および解釈は、接触仮説に反する。障害をもつ友人がどのような友人なのか、またその人とどのような関係や交流をもっているかにもよるが、障害の特性やそれに由来するコミュニケーションの難しさ等が関係した、誰もが一定程度味わう不調和な経験によって、障害をもつ友人がおらずそのような経験をもたない学生以上に、潜在的には不快感を抱くようになったということがあるかもしれない。

3. IATのD-scoreと発達障害者に対する関わりや考え方との関係について

まず、発達障害者との関わりや程度の程度はD-scoreと有意な相関関係になく、関わりや深さは潜在的態度に関与しない可能性が示唆された。この結果および解釈は、接触仮説とは異にする。本研究では、発達障害者との単なる接触頻度ではなく関わりや深さが深いほど潜在的態度指標のD-scoreは低くなることが予想され、関わりや深さを測定する質問項目を作成したが、その項目に基づいた得点とD-scoreとの有意な相関関係を見出すことはできなかった。このような結果になった理由の1つとして、作成した質問項目が発達障害者との関わりや深さを示す点で不適切であった可能性を挙げることができる。作成した項目群が関わりや深さを的確に測定しているかの妥当性を検証せずに今回用いた。深い関わりとは相互理解の深さが暗に前提視されるが、本研究で用いた項目群はそのようなところまで測定し得ていたとは言えない。

また、発達障害者に対する顕在的態度において「実践的好意」が画像バージョンのD-scoreと有意な負の相関関係にあり、生活場面で発達障害者に積極的に関わることに好意的な人ほど潜在的に不快感を抱かない可能性が示唆された。潜在的態度と顕在的態度は必ずしも一致せず、障害者に対する潜在的態度と顕在的態度の比較を行った研究

では顕在的には「良い」と評価しても潜在的には「悪い」と評価する場合がある (Kurita & Kusumi, 2009; Pruett & Chan, 2006) が、生活場面で発達障害者を受容し積極的に関わることの大切さを顕在的に意識していることに関しては、潜在的に不快感を抱かずに受容している態度が関わっているものと思われる。

4. 今後の課題

まず、言語バージョンIATのD-scoreと画像バージョンIATのD-scoreの間には相関関係はなかったため、両バージョンが同じ潜在的態度を測定していない可能性がある。そもそも今回用いた言語ターゲット刺激と画像ターゲット刺激はそれぞれ、意味表象ネットワーク内のどのような要素を活性化させるのであろうか。言語的情報と非言語的な視覚的情報が異なった形式で記憶され、人は視覚的イメージのシステムと言語のシステムの二つを持つ (Pavio, 1971) とすれば、言語バージョンIATのD-scoreと画像バージョンIATはそれぞれ異なるシステムの意味表象を活性化させていることになり、D-scoreも相互に異なる潜在的態度を表現していることになる。また、Pylyshyn (1981) の主張のように、視覚的な表象 (アナログ表象) は最終的には命題表象に変換されてから貯蔵されているのであれば、画像ターゲット刺激は潜在的態度に関係する意味表象ネットワークに到達するまでに命題表象に変換される過程があり、その過程を含めた処理時間がD-scoreに含まれることになる。今後、発達障害者への潜在的態度を測定する上で、言語バージョンIATと画像バージョンIATのいずれが適切なかの検証していく必要がある。

本研究では、障害をもつ友人の有無や発達障害者との生活上の意識が発達障害者への潜在的態度との関連を検討したが、今後、どのような接触が潜在的なステレオタイプ・偏見を低減させるかを探求していく必要がある。Allport (1954) は、偏見の対象になっている人に多く接触して真の情報に触れることでその偏見は自然に解消されるとする「接触仮説」を考えていたが、本研究ではそのようなシンプルな知見を得ることはなかった。それは、接触効果を高めたり低減させたりする条件があるからではないだろうか。例えばこれまで

に、接触する相手と対等である場合や接触する相手と共同目標のもとに協力しあう場合に、接触効果が大きいことが確認されている (Tausch & Hewstone, 2010)。また、自分が所属する内集団の中に、ある外集団と親しいメンバーがいることを知ることによって、その外集団に対する態度が好意的になるという「拡張接触 (extended contact)」という接触効果もある (Wright, Aron, McLaughlin-Volpe, & Ropp, 1997)。さらには、ある外集団と上手く交流していることを想像することで、その外集団に対する態度が好ましいものへと変化するという「仮想接触 (imagined contact)」もある (Turner & Crisp, 2010)。今後いっそう、発達障害者との調和的・好意的関係を社会の中で育むために、どのような接触環境を多くの人に提供すればよいかを検討する必要があるだろう。

V. 引用文献

- Aaberg, V. A. (2012). A path to greater inclusivity through understanding implicit attitudes toward disability. *The Journal of nursing education*, **51**, 505-510.
- Allport, G. W. (1954). *The nature of prejudice*. Cambridge, MA: Perseus Books
- Devos, T. (2008). Implicit attitudes 101: Theoretical and empirical Insights. In (Eds.) , W. D. Crano & Radmila Prislin, *Attitudes and attitude change* (pp. 61-84). New York, NY: Psychology Press.
- Enea-Drapeau, C., Carlier, M., Huguet, P. (2012). Tracking subtle stereotypes of children with trisomy 21: From facial-feature-based to implicit stereotyping. *PLoS ONE*, **7**, e34369.
- Fukushima, H., & Hiraki, K. (2006). Perceiving an opponent's loss: Gender-related differences in the medial-frontal negativity. *Social, Cognitive, and Affective Neuroscience*, **1**, 149-157.
- Gawronski, B & Payne, B. K. (2010). *Handbook of Implicit Social Cognition: Measurement, Theory and Application*. New York, NY: Guilford Press.
- Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, **102**, 4-27.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the Implicit Association Test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 197-216.
- Hein, S., Grumm, M., & Fingerle, M. (2011). Is contact with people with disabilities a guarantee for positive implicit and explicit attitudes? *European Journal of Special Needs Education*, **26**, 509-522.
- Heinemann, W., Pellander, F., Vogelbusch, A., & Wojtek, B. (1981). Meeting a deviant person: Subjective norms and affective reactions. *European Journal of Social Psychology*, **11**, 1-25.
- Knickmeyer, R., Baron-Cohen, S., Raggatt, P., Taylor, K., & Hackett, G. (2006). Fetal testosterone and empathy. *Hormones and Behavior*, **49**, 282-292.
- Kurita, T. & Kusumi, T. (2009). Implicit and Explicit Attitudes toward People with Disabilities and Effects of the Internal and External Sources of Motivation to Moderate Prejudice. *Psychologia*, **52**, 253-260.
- 栗田季佳 (2015). 見えない偏見の科学：心に潜む障害者への偏見を可視化する 京都大学学術出版
- 栗田季佳・楠見孝 (2012). 障害者に対する両面価値的態度の構造—能力・人柄に関する潜在的—顕在的ステレオタイプ— 特殊教育学研究, **49**, 481-503.
- 文部科学省 (2007). 「発達障害」の用語の使用について Retrieved from https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/002.htm (2018年5月10日)
- 生川善雄 (1995). 精神遅滞児 (者) に対する健常者の態度に関する多次元的研究 特殊教育学研究, **32**, 11-19.
- Paivio, A (1971). *Imagery and verbal processes*. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- Pruett, S. R., & Chan, F. (2006). The development and psychometric validation of the Disability Attitude Implicit Association Test. *Rehabilitation Psychology*, **51**, 202-213.

- Pylyshyn, Z.W. (1981) The imagery debate: Analogue media versus tacit knowledge. *Psychological Review*, **88**, 16-45.
- Rojahn, J., Komelasky, K.G. & Man, M. (2008). Implicit Attitudes and Explicit Ratings of Romantic Attraction of College Students Toward Opposite-Sex Peers with Physical Disabilities. *Journal of Developmental and Physical Disabilities*, **20**, 389-397.
- Singer, T., Seymour, B., O'Doherty, J. P., Stephan, K. E., Dolan, R. J., & Frith, C. D. (2006). Empathic neural responses are modulated by the perceived fairness of others. *Nature*, **439**, 466-469.
- Stephan, W. G., & Stephan, C. W. (1996). Predicting prejudice. *International Journal of Intercultural Relations*, **20**, 409-426.
- Takahashi H, Ideno T, Okubo S, et al. (2009). Impact of changing the Japanese term for 'schizophrenia' for reasons of stereotypical beliefs of schizophrenia in Japanese youth. *Schizophrenia Research*, **112**, 149-152.
- Tausch, N., & Hewstone, N. (2010). Intergroup contact and prejudice. In J. F. Dovidio, M. Hewstone, P. Glick, & V. M. Esses (Eds.) , *The SAGE handbook of prejudice, stereotyping, and discrimination* (pp.544-560). London, UK: SAGE.
- Thomas, A., Doyle, A., & Vaughn, D. (2007). Implementation of a computer based Implicit Association Test as a measure of attitudes toward individuals with disabilities. *Journal of Rehabilitation*, **73**, 3-14.
- Turner, R. N.; Crisp, R. J. (2010). Imagining intergroup contact reduces implicit prejudice. *British Journal of Social Psychology*, **49**, 129-142.
- Wright, S. C., Aron, A., McLaughlin-Volpe, T., & Ropp, S. A. (1997). The extended contact effect: Knowledge of cross-group friendships and prejudice. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 73-90.

(受稿：2021年1月28日，受理：2021年3月31日)

The relation between implicit attitudes toward developmental disorders and involvements with and beliefs about persons with developmental disorders

Takahiro HISAZAKI

The present study explored how past experiences involving persons with developmental disorders (DD) were related to implicit attitude toward them, and how the implicit attitude was related to explicit attitude. Thirty undergraduate students responded to a questionnaire regarding their own experiences involving persons with DD and explicit attitude toward persons with DD, and then took both language and image versions of developmental disorder implicit association tests (DDIAT) to measure implicit attitude toward persons with DD. A D-score (Greenwald et al., 2003) of DDIAT language-version in students who had handicapped friends was higher than in those who didn't, suggesting that students who had handicapped friends tended to implicitly feel more discomfort with persons with DD. A D-score of DDIAT image-version had a significantly negative correlation with explicit favorable attitude toward persons with DD in everyday life, implying that students who consciously had more favorable attitude toward persons with DD tended to implicitly feel more comfort with persons with DD.

Key words: implicit attitude, implicit association test, developmental disorder, contact hypothesis